筑前国分尼寺跡・陣ノ尾遺跡

他、歴史時代遺跡調査概要２編

太宰府町の文化財第４集

１９８１

古都大宰府を守る会

筑前国分尼寺跡・陣ノ尾遺跡

福岡県筑紫郡太宰府町大字国分所在遺跡の調査概要

1981

古都大宰府を守る会

序　　文

このほど、太宰府町教育委員会は昭和55年度に発掘された遺跡の概要を刊行したので、本会においても一般の活用を考慮し増刷を行なった。次の一ページには遺跡の現場でおこる開発と調査の葛藤が凝縮して示され、鋭い調査者の視点は一つの土器片を豊富な歴史物語にアレンジして我々に語りかける。めまぐるしく急激な社会の片隅で、地道な作業が続けられていることに我々は目をみはる。こうして印された一冊は、一般の人々や研究者、学生に歴史追求の素材となれば、当会にとっても光栄に思う次第である。

昭和56年３月31日

財団法人　古都大宰府を守る会
理事長　瓦　林　　潔

例　　言

・本書は太宰府町が1980年度に国、県費の補助を受けて実施した太宰府第６小学校（仮称）建設予定地に所在する遺跡その他の調査概要である。

・調査組織および関係者

調査主体　太宰府町教育委員会

総括　教育長　陶山直次郎

庶務　社会教育課長　木本茂　　調査担当者　文化財係　山本信夫

文化財係長　鬼木冨士夫　　同　岡部大治

発掘作業員　白水カズエ・白水いせの・中島ウメノ・中島タキノ・中島チズル・中島としの・中島たか子・中島やえこ・中島猛・荻尾万寿子・荻尾マキ子・荻尾淳一・高原カヨ子・伊藤ツル代・白木智枝・田中テル子・田中平助・寺崎ハル子・百田ヤス・貞包サツキ・大野キヌエ・大野謙太郎・鬼木トキヨ・平田ソヨ・松島のり子・服部佐知子・花田ハルノ・花田照代・田原千恵子・西山和子

整理作業員　原野正子・吉田勝子・佐野芳子

・本書の執筆、編集は山本が行なった。また付編として1979年度に太宰府町教育委員会が発掘調査を行なった宮ノ本遺跡の出土人骨について、九州大学医学部教授(解剖学)永井昌文先生に鑑定報告を寄せていただいたので合わせて本書に収録した。

・遺構の実測は山本、岡部が行ない、遺物の実測、遺構写真、製図は山本が行なった。また遺物の写真は平島美代子氏にお願いした。遺物の整理、復原には岩瀬正信氏のご協力をえた。

・本書で使用する記号などの説明

遺構の表示法

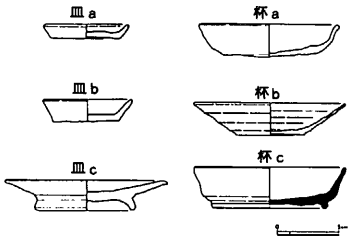
S－遺構	
B	建物
D	溝
E	井戸
K	土坑
X	その他

「平城宮発掘調査報告」Ⅱ〈1962〉の例にしたがった

遺物の調整法など

――――	シャープな段、綾。横ナデとヘラ削りの境など。
― ―	鈍い段、綾。横ナデ、ヘラ削りの綾線など。
≡≡≡	ハケ目
―・―・―	陶磁器などの施釉された範囲
◯	付着物（重ね焼きの目あと、焼台、煤など）

土器の器種分類



陶磁器の分類は横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４〈1978〉にもとづいた。

目　　次

Ⅰ　調査経過……1
Ⅱ　遺跡の位置と環境……1
Ⅲ　筑前国分尼寺跡の調査……5
Ⅳ　陣ノ尾遺跡の調査……9
Ⅴ　左郭八条七坊の調査……15
Ⅵ　原遺跡の調査……19
付編　宮ノ本遺跡出土の人骨……22

Ⅰ　調査経過

太宰府町教育委員会は1980年度に表１にあげられる遺跡の発掘調査を実施した。この中で学術的問題あるいは文化財の指定などを目的としたものは一件もなく、すべて土木工事や宅地造成などの事前調査が主体となっている。内容的にみると筑前国分尼寺跡第１次調査、陣ノ尾遺跡第１、２次調査は太宰府町第６小学校の建設に伴うもので、進入道路や造成予定地が推定されうる寺域の一部などにかかるため発掘調査を実施したものであった。筑前国分尼寺跡第２次調査は陣ノ尾遺跡の第１次調査中に民間より宅地造成の申請が出されたことから実施した。ここは寺域の西限を推定しうる所であったため急遽、調査を行なった。左郭八条七坊地域は従来、南バイパス関係や株式会社寿屋の建築に伴う発掘調査などにより、密度の高い歴史時代遺跡の所在が知られていたが、ここでも宅地造成の申請がなされたので、筑前国分尼寺跡第２次調査を一時中断して調査を実施した。こうして発掘が続く中で原遺跡周辺の宅地造成中に竪穴式石室１基と多量の歴史時代土器片が発見され、工事関係者から太宰府町教育委員会へ通報を受けた。これについては筑前国分尼寺跡第２次調査が終了すると同時に調査を開始した。また1979年度から開始された太宰府町区画整理事業に伴う発掘調査については、本年度に工事が施行される観音世音寺中心線の南側延長にあたる部分を九州歴史資料館が行ない、その他の条坊地域を太宰府町教育委員会が行なった。坂本大正府遺跡は区画整理に伴う土取場用地として事前調査を行なったものである。なお、区画整理に伴う調査内容については来年度に報告を予定している。

調査地点	調査期間	対象面積㎡	調査面積㎡
筑前国分尼寺跡第１次調査	1980.6.3～6.10	2,262	78
〃　　第２次　〃	1980.7.24　～8.28	429	53
陣ノ尾遺跡第１次調査	1980.6.5～7.21	48,000	136
〃　　第２次　〃	1981.1.21　～3.31		2,900
左郭八条七坊遺跡	1980.8.6～8.11	1,794	44
原遺跡	1980.9.4～11.14	1,634	85
1980年度区画整理の事前調査	1980.6.10　～　1981.3.19	200,000	590
坂本大正府遺跡	1980.12.18～12.26	1,615	79

表１

Ⅱ　遺跡の位置と環境

博多湾に注ぐ御笠川を南東へさかのぼると、福岡平野は東に大城山、西に背振山の山塊群と

図1　主要遺跡分布図

1.筑前国分尼寺跡	2.筑前国分寺跡	**3.陣ノ尾遺跡**
4.御笠団印出土地	5.遠賀団印出土地	6.大宰府条坊跡
7.左郭八条七坊	8.御笠川南条坊遺跡	9.君畑遺跡
10.般若寺跡	**11.原遺跡**	12.大野城跡

間近に接しながら次第に幅を狭め、太宰府町へと至る。ここは福岡平野と筑紫平野の分枝点にもあたり、古代から現代を通じて筑前と筑後を結ぶ交通、経済、文化などの重要なルートに位置する。町の歴史はすでに1万年以前の先土器時代から知ることができるが、とくに7世紀後半にはこの地域に大宰府が置かれ、西海道の政治、経済的中心地として興隆をみた。したがって歴史時代遺跡の分布に顕著な特色を持っている。律令時代に西海道九国三島を統括した大宰府政庁とその関連遺跡は国家的な文化遺産として高い価置を有する。大宰府政庁は大城山（標高 410m ）の南側山麓の小高い平坦地にある。政庁を中心としてその南側一帯の平野部に東西22条南北各12坊に区画された条坊跡が施行され、官僚の邸宅、一般人の集落、市場、墓地、農地などが形成されたと考えられる。政庁の東には学校院がつくられ官僚の子弟を養成した。さらに東には天智天皇の発願による観世音寺があり、郭内には般若寺、杉塚廃寺、塔原廃寺などの古代寺院も点在して当時の宗教と文化の中心をなした。政庁の西側には瓦の生産遺跡があり、「遠賀団印」・「御笠団印」の2つの軍団印の出土によって軍団の所在も推定される。広大な府の防衛のためには、北側の大城山を中心とした丘陵に数峰の尾根を土塁で連鎖した大野城が 665年に築かれ、北西の幅狭い平野部には博多側からの侵攻を防ぐ水城が 664年に築堤された。またはるか10km南方には基肄城が 665年に築かれ防衛と監視を行なっていた。律令機構がくずれ中世に至っても多くの集落や墓地などの遺跡は各所に所在しており、絶えまない祖先たちの躍動をみることができるのである。

ところで筑前国分尼寺跡は大城山の南側山麓にあり、一帯は標高37m 程の平坦地となっている。ここを訪れるには西鉄大牟田線の都府楼駅で下車し北西へ徒歩で約20分、2kmほどで筑前国分寺跡へ至るが、尼寺はこの西側 300m の一帯と推定されている。尼寺についてはこれまでに発掘調査が行なわれたことはなく具体的に内容などの解明に及んでいない。ただ造り出しのある2個の礎石の所在から位置が推定されてきた。以前にはまだ多くの礎石が存在していたといわれるが、北方の西の池の護岸工事などで持ち去られたものも多いと伝え聞く。陣ノ尾遺跡は筑前国分尼寺跡の北方に位置する標高40～70m の丘陵上にあり、周辺からは甕棺や石器、鉄器の発見をたびたび耳にした。左郭八条七坊の一帯は低湿地の遺跡であるが、これまでの調査により、平安～室町時代の集落、井戸、溝、土坑などの遺構や多数の土器、木器、鉄器などが確認され、中世の大宰府を知る基礎資料の一端を提示した所として重要な地域にあたる。原遺跡は大城山の東方山麓部で標高80～90m ほどの丘陵地にある。ここは平安時代に僧、円珍の弟子八人が八つの寺を建てた所と言われ、原山無量寺跡あるいは原八坊跡と総称されている。しかしながらその建物跡などについては現在のところ所在が明確ではない。以上のような遺跡にも次第に開発の手が迫っており、ここに太宰府町教育委員会によって発掘のメスが加わることになったわけである。

Ⅲ　筑前国分尼寺跡の調査

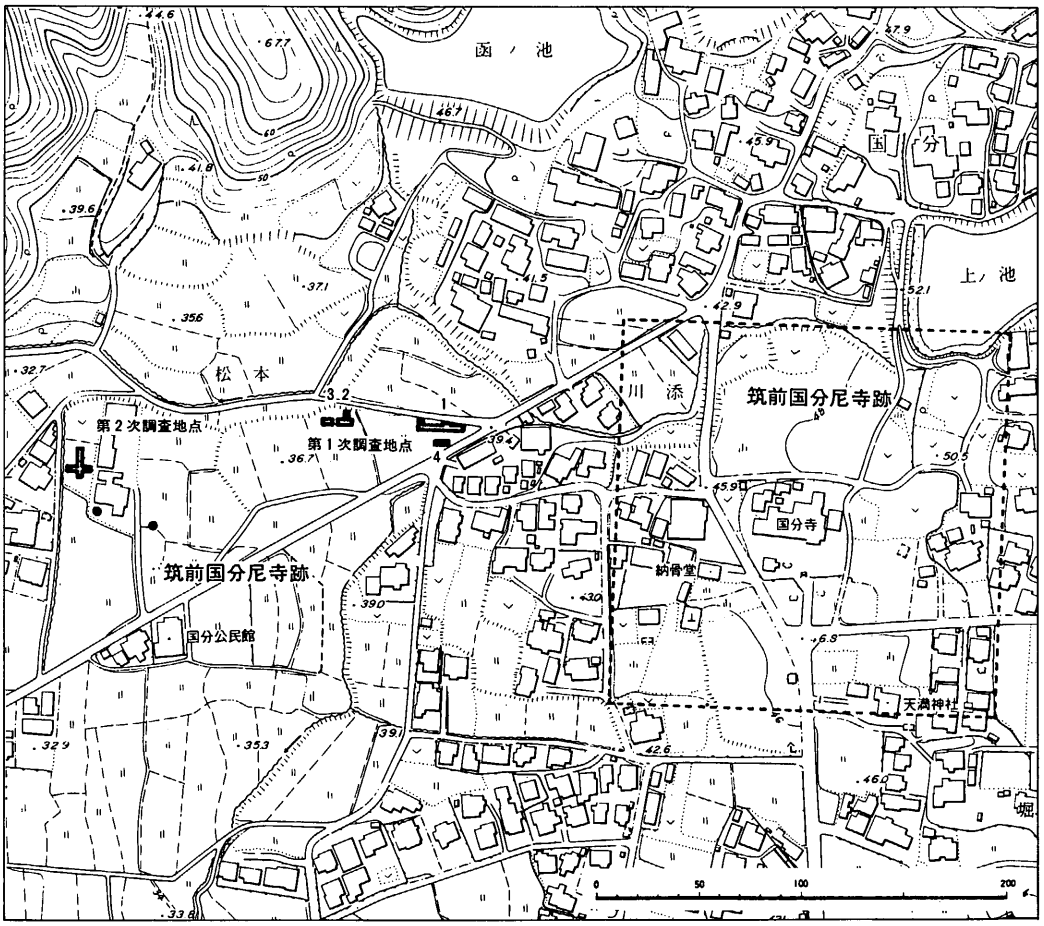
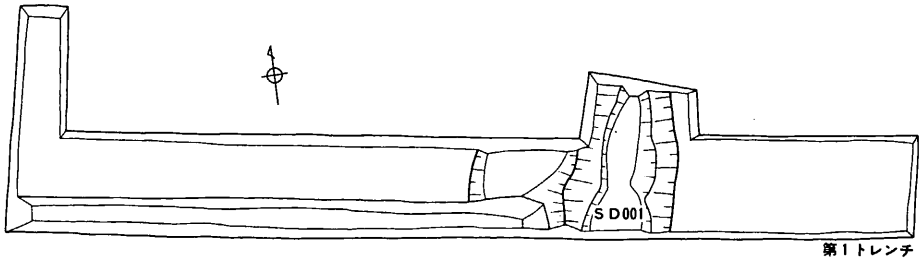
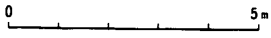


図2　筑前国分尼寺跡周辺図　トレンチ配置図
1～4，第1次調査トレンチ番号　●礎石

〔1〕第1次調査

筑前国分尼寺跡は現存する礎石の周辺一帯と推定されているが、このたび礎石の北東約 100 m の近接地域において、太宰府第6小学校の建設に伴う道路拡幅工事が予定されたので事前調査を行なった。今回、調査した土地の地番は太宰府町大字国分字松本 467－3，468－1，461－1である。





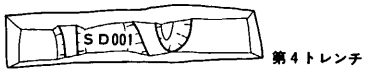


図3　第1次調査遺構配置図 (1/150)

1　検出遺構（図3・4）

道路拡幅予定地に1～4のトレンチを設定した。各トレチの土層は上から表土、床土、茶褐色土、暗灰色砂礫、花崗岩バイライン土の層序をなし、暗灰色砂礫の上面が地山である。ただし後世に幾分か上面の削平をうけている。茶褐色土には弥生中期から鎌倉時代までの遺物を包含している。遺構は第1、4トレンチに溝が認められたのみである。

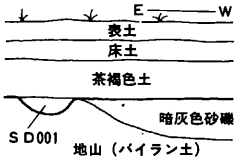


図4　土層模式図

SD　01　南北に流れる溝と思われ、砂の堆積土から成る。幅は2m、深さは 0.3m である。

2　出土遺物

SD 001　出土土器（図5・図版14）

須恵器

坏a (1)　体部内外はヨコナデ、底部内面はナデ、底部外面はヘラ切りされる。口径は13.2cm、高さは3.5cm、底径は10.0cmである。

坏c (2)　断面四角の低い高台で体部と底部の境にシャープな綾を有する。口径は19.0cm、高さは2.8cmである。

皿a (3)　体部内外面はヨコナデ、底部内

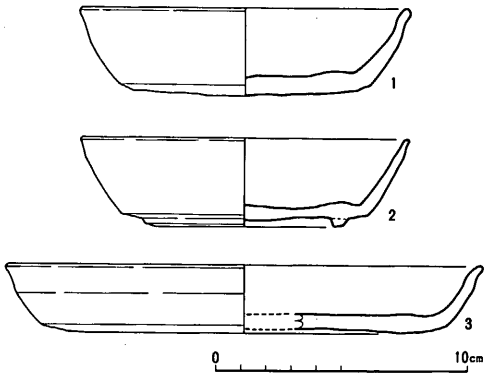


図5　SD001出土遺物 (1/3)

面はナデ、底部外面はヘラ切りされ外周縁はヘラ削りされる。口径は19.0cm、高さは2.8cm、底径は16.1cmである。

SD 001からは他に須恵器甕、蓋、土師器椀、坏などの破片、瓦などが出土した。土師器坏は内外をヘラ磨きされるもので、同様な手法、器形は大宰府史跡SK 1084、SE 1081(註1)などでみられる。

〔2〕第2次調査

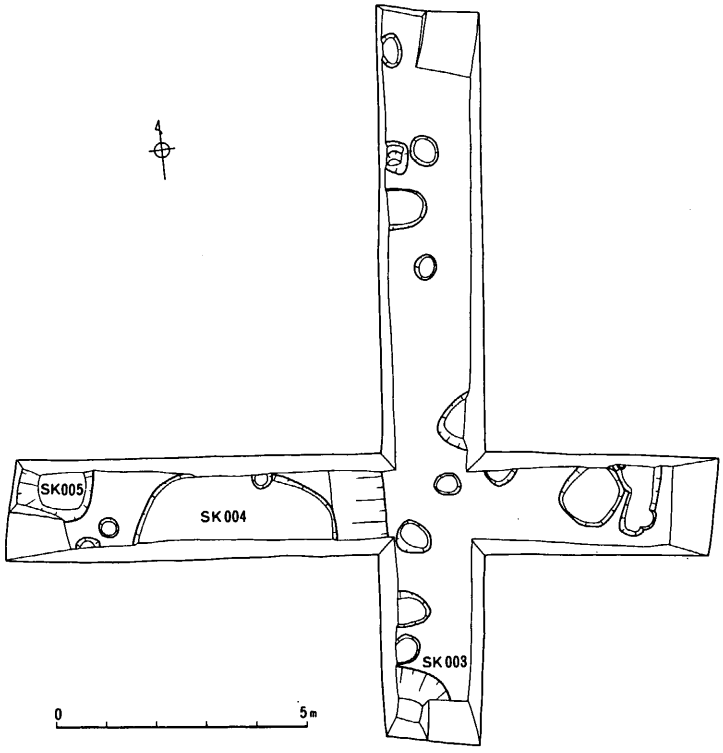


図6　第2次調査遺構配置図 (1/150)

住宅建設に伴う事前調査である。この地点は礎石の現存する所から北西へ40m の近接距離にあり、尼寺の西側範囲を検出する可能性が持たれたため発掘調査を実施した。地番は太宰府町大字国分字松本457である。

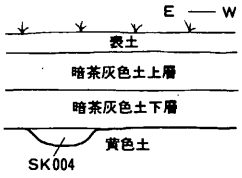


図7　土層模式図

1　検出遺構（図6・7）

調査区の土層は上から表土、暗茶灰色土、黄色土に、約1m強堆積し、黄色土の上面は遺構面で、土坑3、ピットが検出された。暗茶灰色土は弥生中期から中世までの土器片を包含する。

土　坑

SK 003　南および西側を発掘しておらず規模は不明である。鉄滓を出土した。

SK 004　東西4.1m の浅い土坑で南側は未発掘である。多数の鉄滓、フイゴ羽口を出土した。

SK 005　東西1.5m 、深さ0.4m の土坑で北側は未発掘である。

2.出土遺物

(1) 土　器（図8）

SK 004 出土土器

土師器・椀c（1）全体に磨滅がすすみ調整は不明である。淡赤灰色を呈する。

SK 005 出土土器

須恵器、蓋（2）口縁端部は小さな三角形を呈する。

暗茶灰色土下層出土土器

青磁、椀（3）黄色味の灰色を呈する胎土で、全面にうぐいす色の釉を施している。高台部畳付と内面見こみに重ね焼きの目あとがある。越州窯系青磁である。

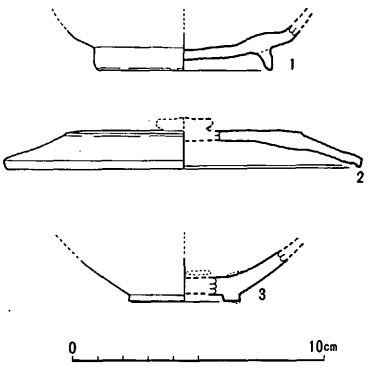


図8　第2次調査出土遺物（1/3）

(2) 瓦　類

軒丸瓦5点、鬼瓦1点、丸、平瓦数点が出土した。

鬼瓦（図版14）　鬼面の右側破片で、残存する上部幅は約18cm、高さは約33cmある。胎土に砂粒を含み軟質で灰白色を呈する。

その他暗茶灰色土下層、SK 004から多数の鉄滓、フイ羽口（図版14）が出土した。

〔3〕小　　結

第1、2次調査を簡単にまとめてみたい。SD 001は土器などから8世紀後半と推定される。SK 003、004は平安時代のものであるが鉄滓、フイゴ羽口を出土しており鉄器の工房などが周辺に存在する可能性がある。また弥生中期中頃から後期前半頃の土器片をかなり検出したことから、北及び東方の台地にこの時期の遺跡を想定できよう。後述の陣ノ尾遺跡はその1つであろう。なお国分尼寺の主要建物に結びつく遺構は検出できなかったが、今後は急激な宅地化を懸念して、主要伽藍を目的とした計画調査を早い機会に進めていく必要を感ずる。

註1.　石松好雄ほか「大宰府史跡　昭和52年度発掘調査概報」九州歴史資料館（1978）

Ⅳ　陣ノ尾遺跡の調査

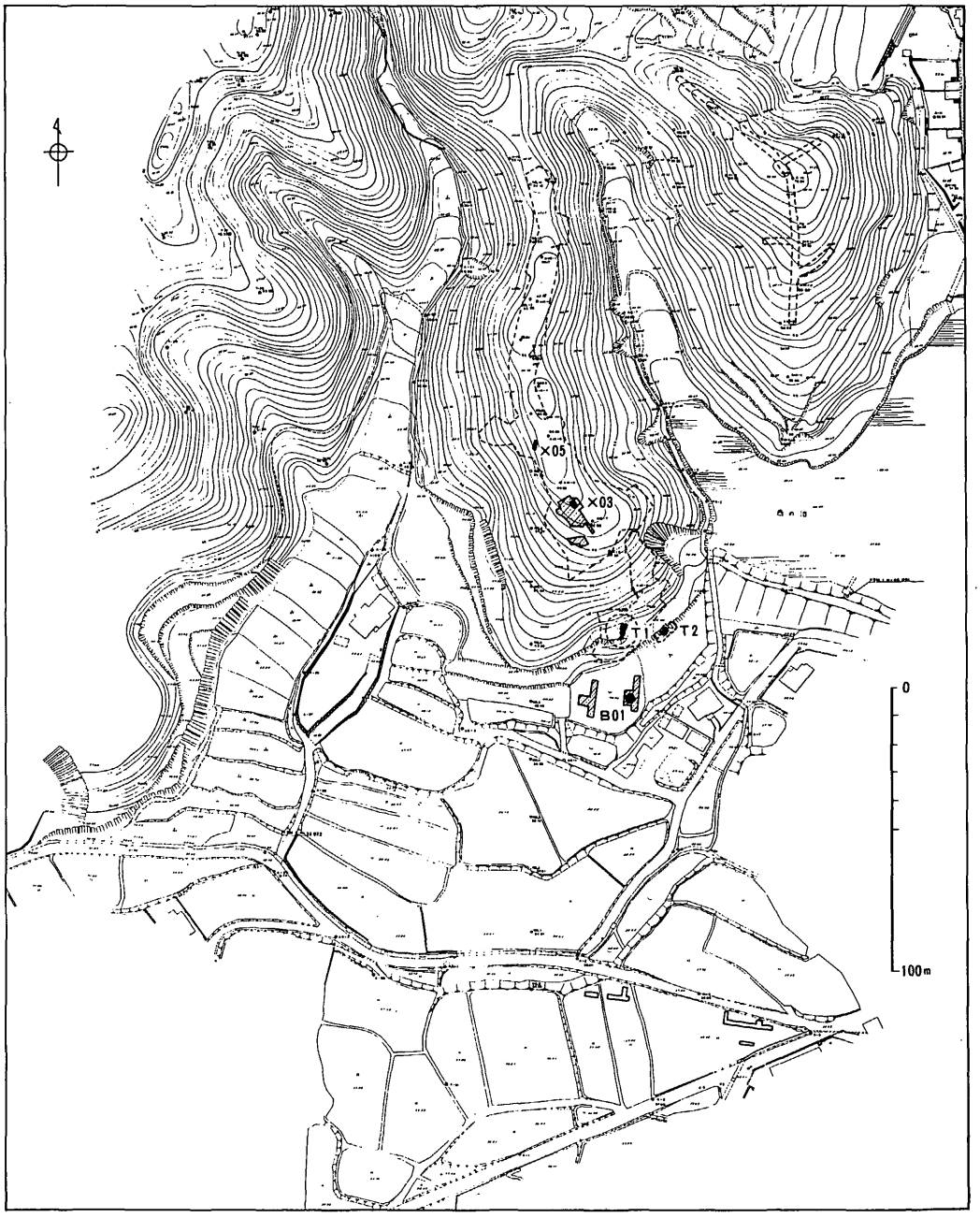


図9　陣ノ尾遺跡全体図（1/2500）

第1次調査地点
第2次調査地点
国分尼寺跡第1次調査地点

T．古墳　B．住居跡　X．墳墓

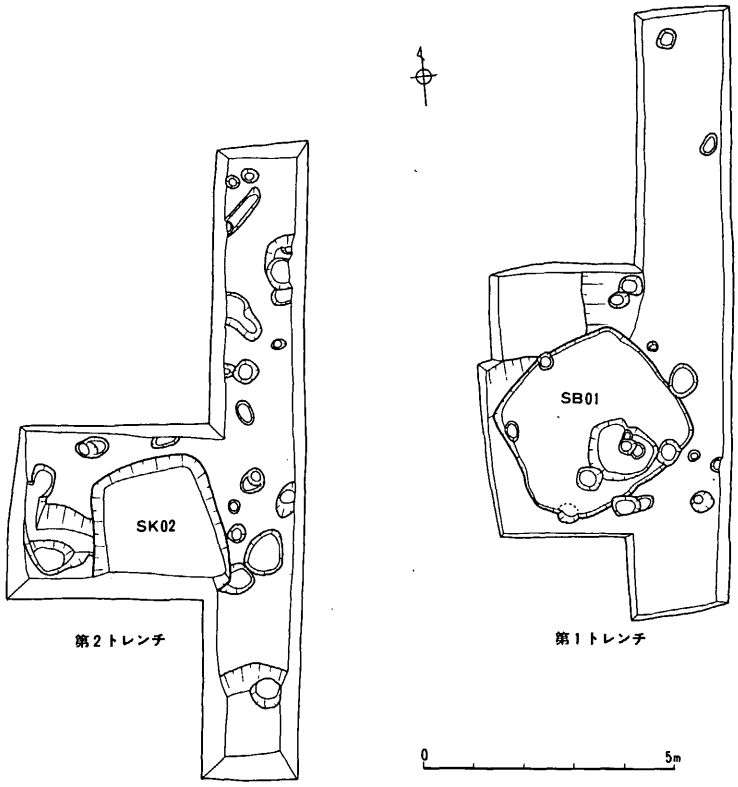


図10　第1次調査、第1・2トレンチ遺構配置図（1/150）

〔1〕第1次調査

陣ノ尾遺跡の所在地は太宰府町大字国分字陣ノ尾100、101、102－2、字妙見1030－1ほかにわたっているが遺跡の名称は陣ノ尾に統一した。当該地の一部は遺物散布地として登録されていたが、今年度に太宰府第6小学校建設に伴う造成を行なうことになり発掘調査を実施した。また建設予定地の範囲は決定が大幅に遅れたためやむをえず2次にわたって調査を行なった。

1　検出遺構（図10）

第1次調査で検出した遺構は住居跡1、土坑1、箱式石棺墓1、ピットなどである。

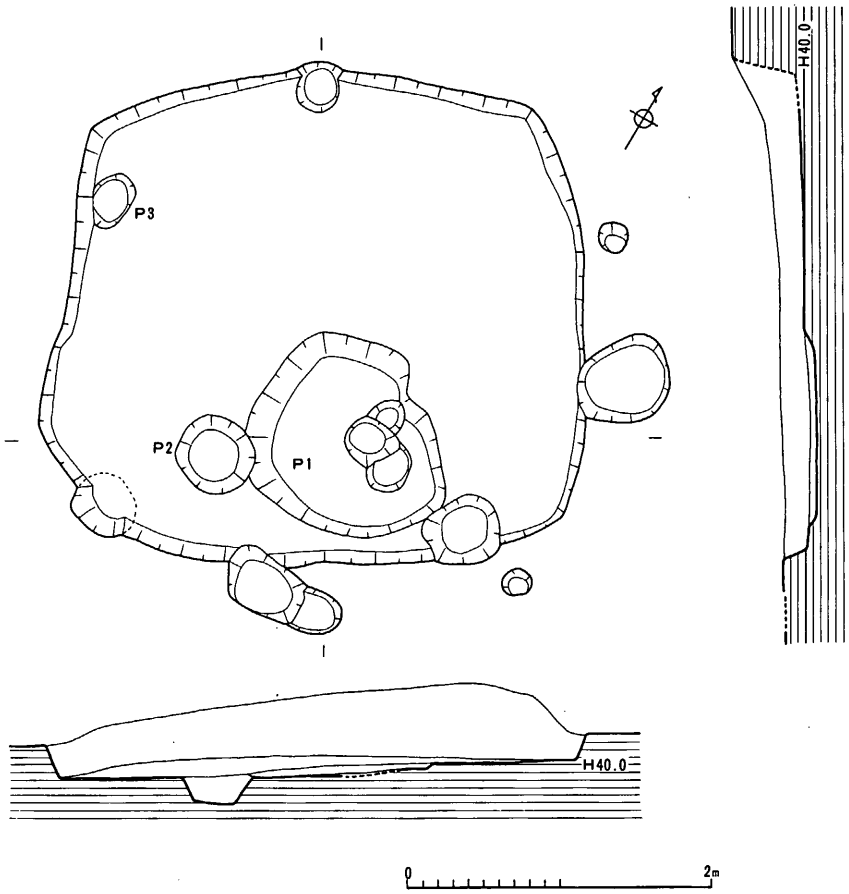


図11　SB01実測図（1/50）

住居跡

SB 01（図11）　不整な方形プランをなし、東西軸は約3.4m、南北軸は3.3m、北側の深さは0.4m、南側の深さは0.2mである。南側壁寄りに1.2×1.3mの不整形をなす炉がある。竪穴に伴うと思われるピットはP１～３の３つで他のピットは新しいものである。竪穴中央では土器が床面より浮いて出土した。

土　坑

SK 02　東西2.5m、南北2.8mの長方形プランを有し、深さは約0.8mである。

箱式石棺墓

SX 03（図12･13）　盗掘をうけており原形を失っている。残った石材も移動している。墓坑の長軸は2.4m、短軸は1.6mで坑底の西側を一段掘り下げ、花崗岩の石材を組んでいる。

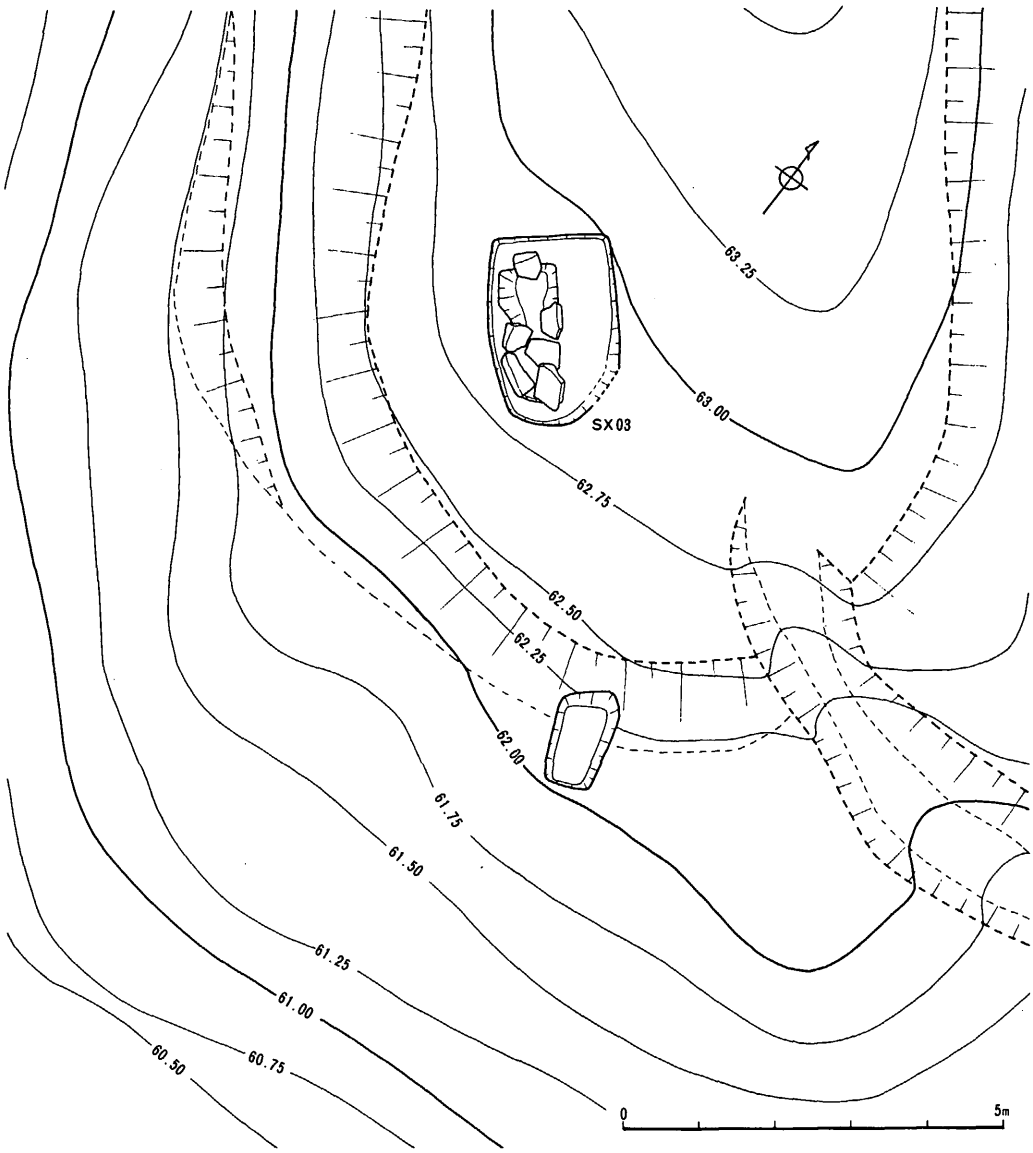


図12　SX03周辺地形図（地山コンタ）(1/100)

2.　出土遺物

SB01出土土器（図14・図版14）

甕（1、2）　口縁部は外反する。内外面はハケ目、口縁部はヨコナデされる。

壺（3）　断面台形の突帯をもつ。外面上方はハケ目、下方はヨコナデされ、丹塗りされる。

その他外面を円塗りされた筒形器台の破片がある。

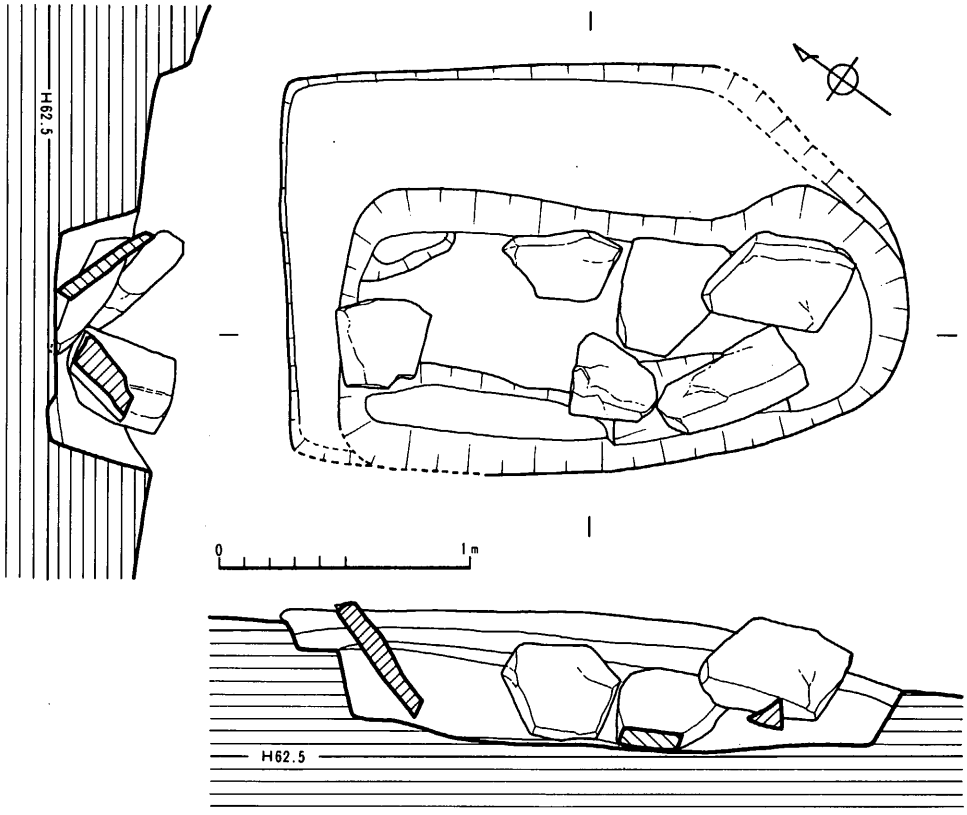


図13　SX03実測図（1/30）

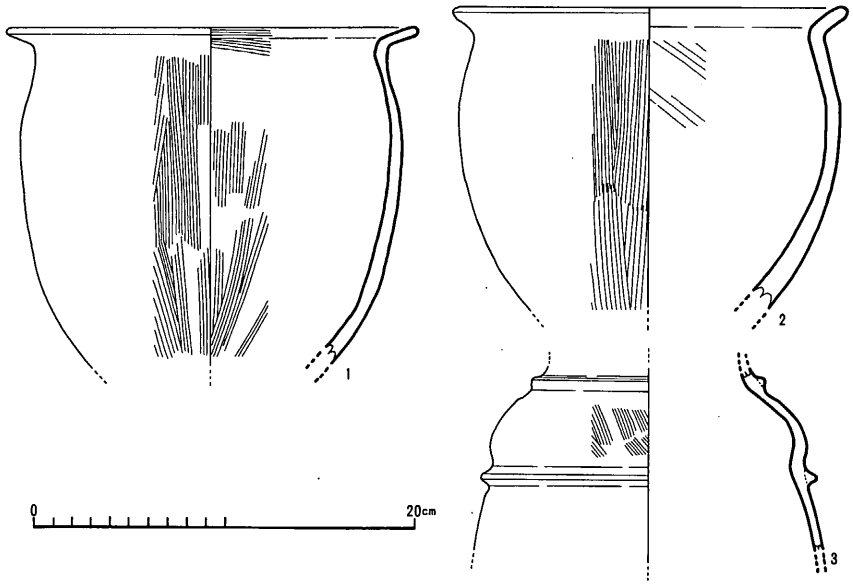


図14　SB01出土遺物（1/4）

〔2〕第２次調査

第１次調査の結果から丘陵尾根上に墳墓などの存在することが予想されたので、第２次調査では尾根を中心として広範に表土を除去した。しかし遺構はあまり広がりがなく、第１次調査地域の周辺にほとんど集中していることが判明した。第２次調査で検出したおもな遺構は古墳２、甕棺墓１、土坑墓１、不明遺構２などである。

古　墳

１号墳　盗掘をうけているが内部は天井部を除き原形を保っている。複室の横穴石室でハの字に開く羨道を有する。羨道は閉塞石が残存している。前室床面では金環３、鉄刀子１、鉄鏃21、鉸具２、須恵器平瓶１、また後室床面では金環１、鉄刀子１、鉄鏃１、さらに閉塞石中から金環１が検出された。築造の時期は６世紀後半と推定される。石室内の埋土中には平安初期の土師器が完形で入ることから、後世に墳墓として使用された可能性がある。

２号墳　横穴石室でその一部を残存する。中世に火葬墓として再使用されたと思われ、床面で灰層と白磁皿を検出した。上部は近世に攪乱をうけ石材が散乱する。

甕棺墓

SX 04　弥生後期前半頃の小児甕棺墓である。

土坑墓

SX 05　鉄刀子の破片１を出土した。

その他の遺構

SX 06　上部は削平され底部のみを検出した。底部は焼け、灰層が上部を覆う。

SX 07　上部に礫積みをもつ不整形の上壙で礫中に完形の土師器皿を出土しており、中世の墳墓である可能性を有する。

〔3〕小　　結

SB 01は土器の特徴から弥生後期前半頃と推定される。今回は一軒のみであったが周辺の微高地に集落の存在する可能性を有する。また出土した土器には丹塗りや筒形器台の破片を含み，あわせて墳墓、祭祀などのまとまった遺構の存在も期待される。横穴式石室は太宰府町内においてこれまで検出されているものよりも比較的，残存の良い例であり、保存について検討を行なっている。石室は歴史時代に開口されており、１号墳は平安初期、２号墳は中世に墳墓として２次的な使用が行なわれているようである。この点、歴史時代墳墓の多様性の一つとして注目される。なお第２次調査の遺物は現在整理中であり、後日、詳細を報告したい。

V　左郭八条七坊の調査

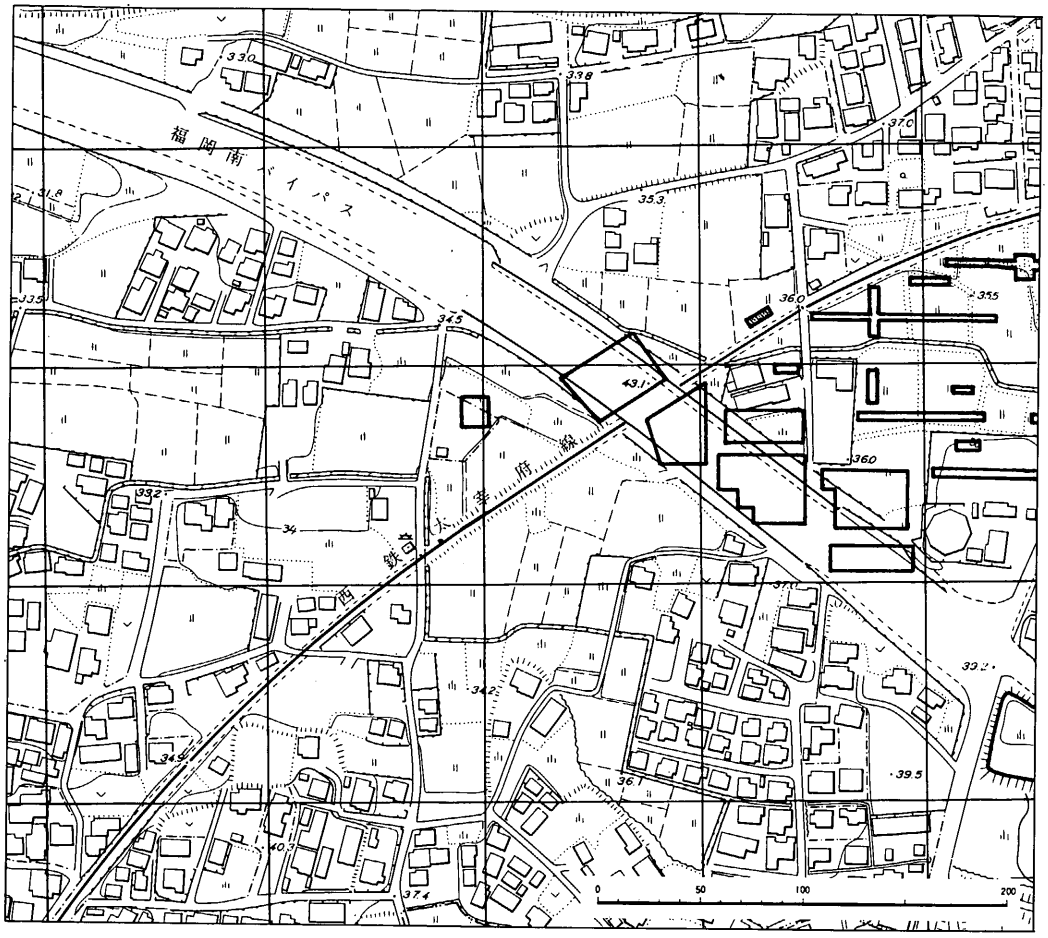


図15　遺跡周辺図

調査地点　既調査地点

住宅建設に伴い緊急に調査されたもので、遺跡の所在地は太宰府町大字太宰府字月見山2705－1である。この地域の東から南側の一帯は南バイパス工事や株式会社寿屋の建設の際に発掘調査が行なわれ、歴史時代の集落、墓地跡として周知であり、今回、申請された時点で遺跡の存在する可能性が強く持たれたため、工事関係者に通報して試掘の必要性を促した。こうして6月30日に試掘を行なったところ遺構が検出され、発掘調査を実施する運びとなった。なお、発掘調査費の一部は土地所有者菊武武夫氏および工事施行の造形住宅株式会社が負担した。

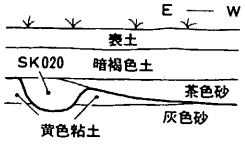


図16　土層模式図

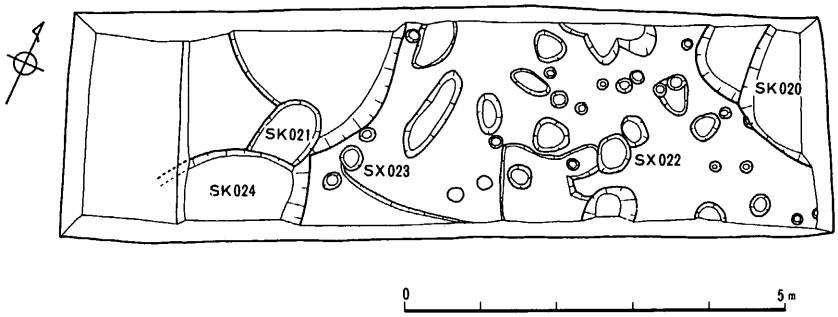


図17　遺構配置図（1/100）

1．検出遺構（図16．17）

土層は上から表土、暗褐色土、茶色砂、黄色粘土、灰色砂の順に堆積する。黄色粘土の上面が遺構面で地表下約 0.5m ほどで検出される。暗褐色土は近世までの陶器片を混入している。この地点の西から西北側にかけては旧地形が下り、黄色粘土も切れ、遺構は少なくなるようである。今回、検出した遺構は土坑、ピットなどである。

土坑

SK 020　東側は発掘しておらず規模は不明である。深さは 0.5m である。

SK 021　南側に重複する SK 024 よりも古い。楕円形プランを有し、長軸は 0.9m 以上、短軸は 0.7m である。

2．出土遺物

SK 020 出土遺物（図18．表２．図版15）

土師器

皿a（1）　底部は糸切りで、底部内面はナデ、体部内外面はヨコナデされる。

坏a（2）　底部は糸切りで板状圧痕を有する。内外面は摩滅する。

青磁

椀（3）　龍泉窯系青磁のⅠ－１～４の底部である。胎土は灰色を呈し黄緑色の釉が厚めに全面施釉される。内面見こみは片彫りによる花文を配するが、器面は荒れモチーフは不鮮明である。高台の見こみには棒状の焼台のあとがある。

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
皿a	1	1	8.4	0.9	7.3	○	○
坏a	1		12.0	2.7	7.9	○	○
	2	2	11.9	2.6	—	○	○

表2　SK 020 土師器計測表　単位 cm
A．番号　B．挿図番号　C．内底のナデの有無
D．板状圧痕の有無

その他瓦器椀、白磁、青磁（越州窯系椀Ⅱ、龍泉窯系椀Ⅰ－１～４、Ⅰ－５a）、青白磁壺、陶器（褐釉、黄緑釉、黒釉）、鉄器、ルツボ、鉄滓などの破片が出土した。

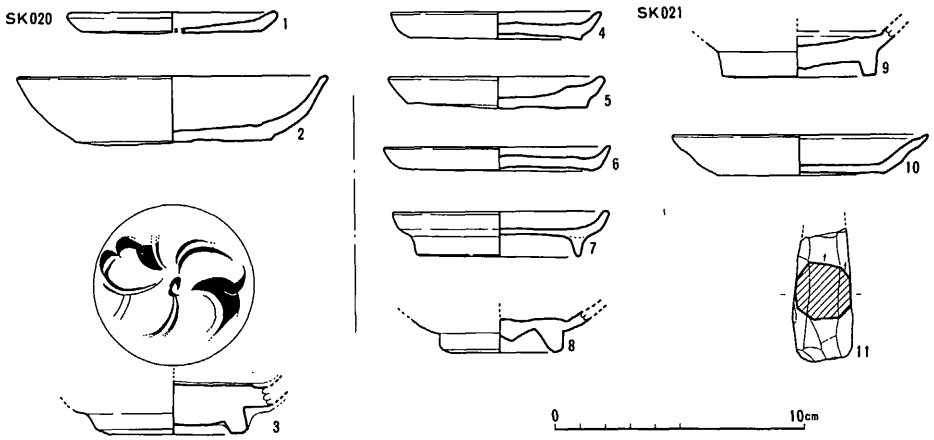


図18　SK020・021出土遺物（1/3）

SK021 出土遺物（図18．表3．図版15）

土師器

皿a（4～6）　底部は糸切りで、底部内面はナデ、体部内外面はヨコナデされる。

皿c（7）　摩滅して調整は不明であるが、底部が糸切りの皿a に高台を付したものである。

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
皿a	1		8.0	1.3	6.0	○	○
	2		8.2	1.0	6.8	○	○
	3		8.3	1.5	6.8	○	○
	4	4	8.4	1.1	6.8	○	○
	5		8.6	1.0	6.8	○	○
	6	5	8.8	1.3	7.2	○	○
	7	6	8.9	0.9	7.6	○	○
	8		9.0	0.9	6.7	○	○
	9		9.2	0.8	7.5	○	○
皿c	1	7	8.6	1.8		○	?

表3　SK021 土師器計測表　単位 cm
A．番号　B．挿図番号　C．内底のナデの有無
D．板状圧痕の有無

青磁

椀（8）　胎土は明灰色を呈し、ガラス質で黄緑ぎみの釉が内面から体部外面にうすく施釉される。体部外面の下方には施釉されない。同安窯系青磁椀Ⅰ類に分類される。

白磁

椀（9）　胎土は灰色で黒粒を含む。釉は黄色味をおびた白色でうすめにかかり、体部外面下方は施釉されない。内面見こみは施釉後に輪状の欠き取りを行なう。白磁椀Ⅷ-2～3に分類される。

皿（10）　胎土は灰白色で黒粒を含む。釉は空色味をおびた白色で全面施釉された後、口縁部内側に欠き取りを行なう。白磁皿Ⅸ－1a に分類される。

不明土製品（11）　一端はやや細く八角柱状にヘラ削りされる。赤褐色を呈し砂粒を含む。

その他青磁（龍泉窯系椀Ⅰ－1～4、Ⅰ－5b、越州窯系壺）、白磁（椀Ⅴ－4ないしⅥ、Ⅵないし Ⅶ、Ⅸ、皿Ⅱ－1）、陶器（黄緑釉、褐釉、無釉）、滑石製品などが出土した。また染付を1点含んでいたがこれは混入品と考えられる。

3．小　結

太宰府周辺の歴史時代土師器については、（A）横田賢次郎・森田勉氏により大宰府史跡の遺構を標式にしたものと、[註1]（B）前川威洋氏により御笠川南条坊遺跡の土器を分類したもの[註2]の２系統の編年案がある。ここではこの２系統の編年を参照として遺構の時期を考えてみたい。SK 020 の土師器は（A）においてはSK 823 ないしSK 830、（B）ではⅡ－５Ａ類に近似した法量を示すことから14世紀初頭前後にその時期の一点を比定しえよう。ただし計測標本 の絶対量が不足しており、検討する余地を残している。SK 021 の土師器は（A）ではSK 601ないし一段階前の SK 1085のもの、（B）ではⅡ－４類のものと近似する法量を示している。ただし白磁Ⅸ類を共伴するところから（A）は SK 601 の段階の方がより妥当と思われ、13世紀前半頃に時期を比定しうる。

註１．横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』４（1978）

註２．前川威洋ほか「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第８集（下）　福岡県教育委員会（1978）

Ⅵ　原遺跡の調査

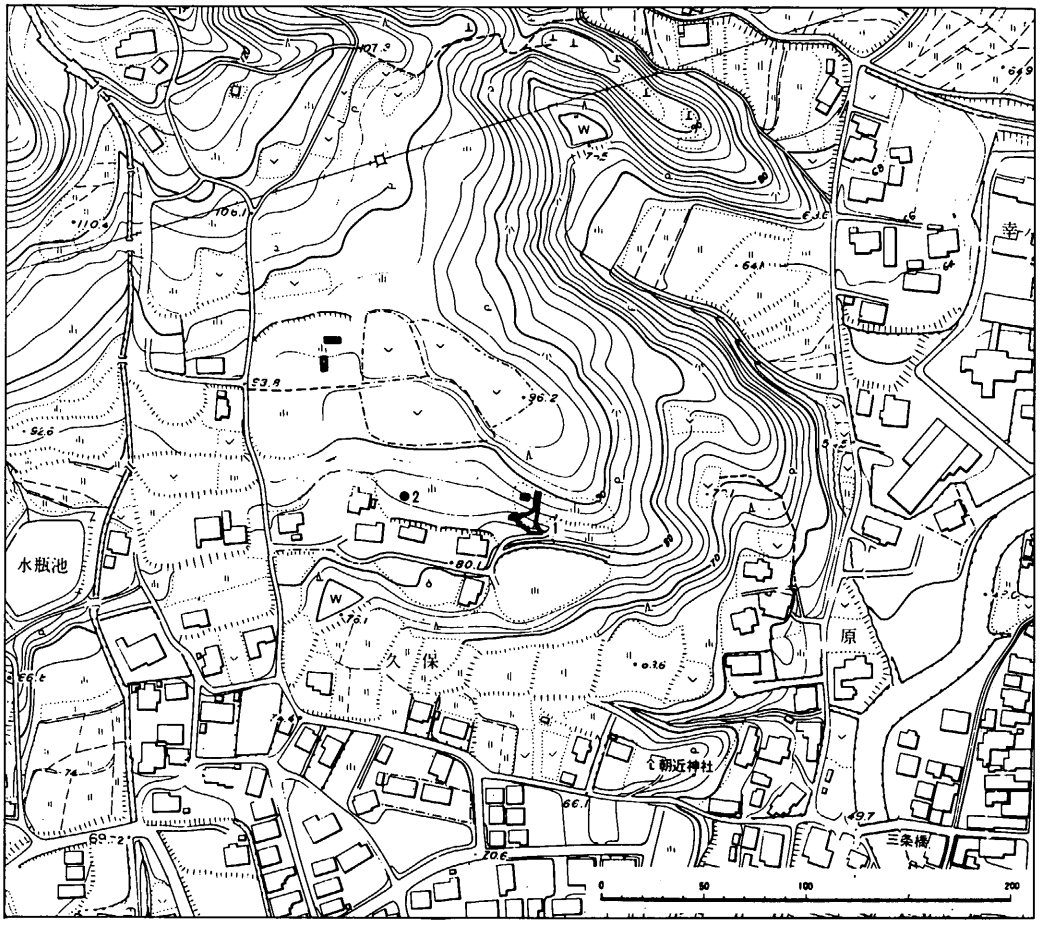


図19　遺跡周辺図

トレンチ
1.SX01　2.土器出土地点

宅地造成工事に伴った緊急調査である。発掘調査を行なうことになった直接の契機は、３月６日に四王寺山の東側山麓にあたる太宰府町大字太宰府字原1597－１の地域で、造成中に竪穴式石室１基が発見され、工事関係者から太宰府町教育委員会へ通報されたことからである。石室の所在するすぐ西側の原1561では、側溝工事により遺構の一部をカットし多量の土器片を出土していたが、この地域については緊急な造成予定がないので、後日、調査を行なうこととした。また調査中に原1551－4、5の地域で住宅建設の申請が行なわれたので、この地域にも２本のトレンチを設定して調査を実施したが、調査の結果とくに顕著な遺構は認められなかった。

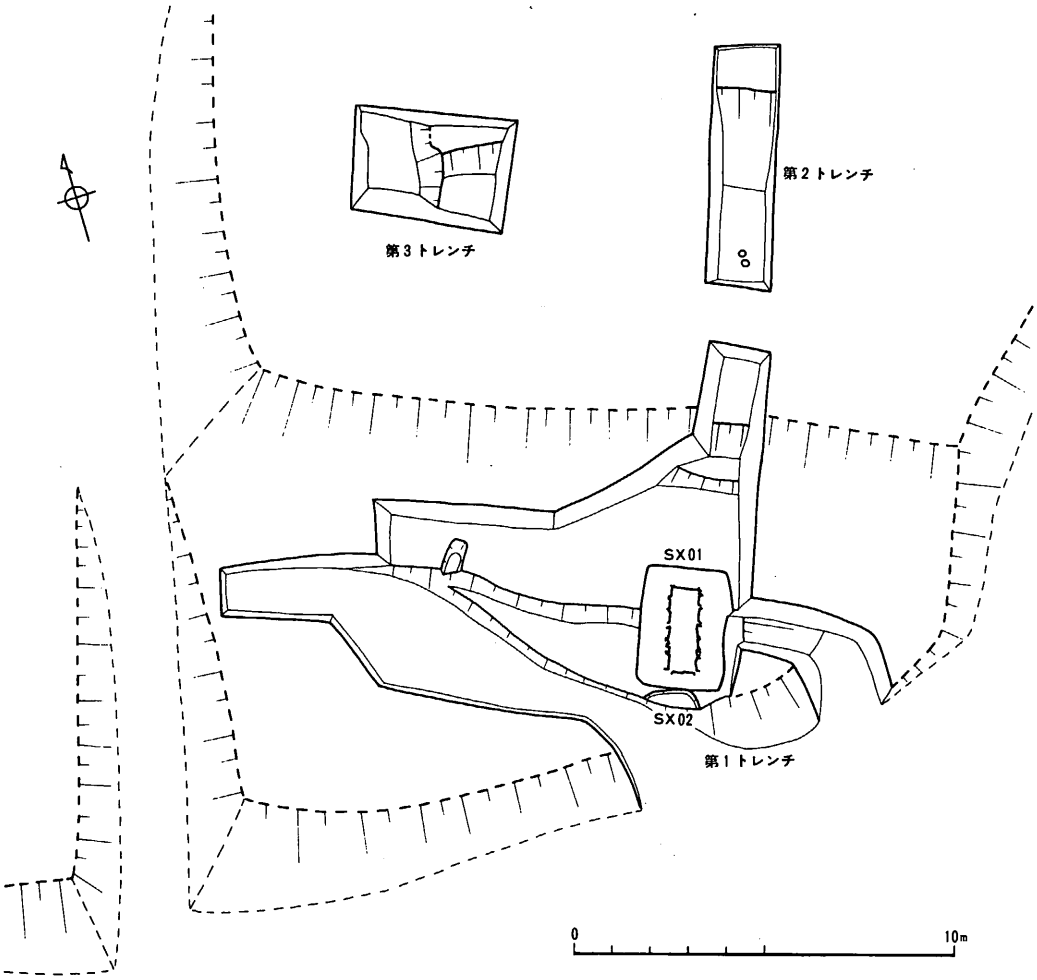


図20　遺構配置図（1/200）

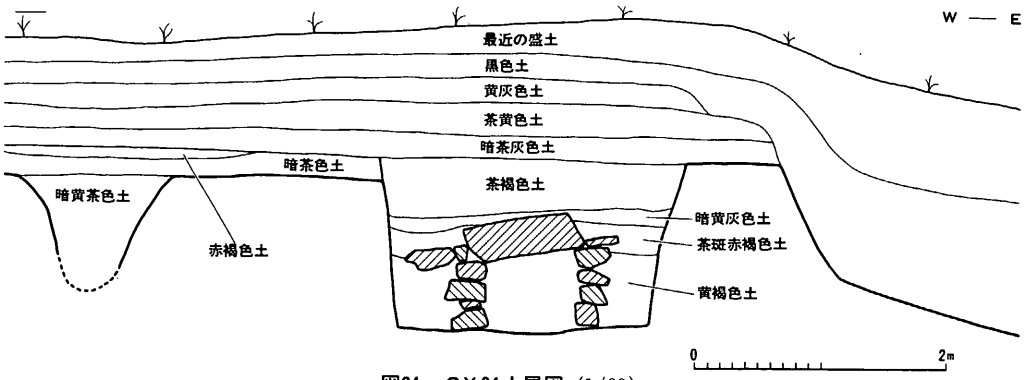


図21　SX01土層図（1/60）

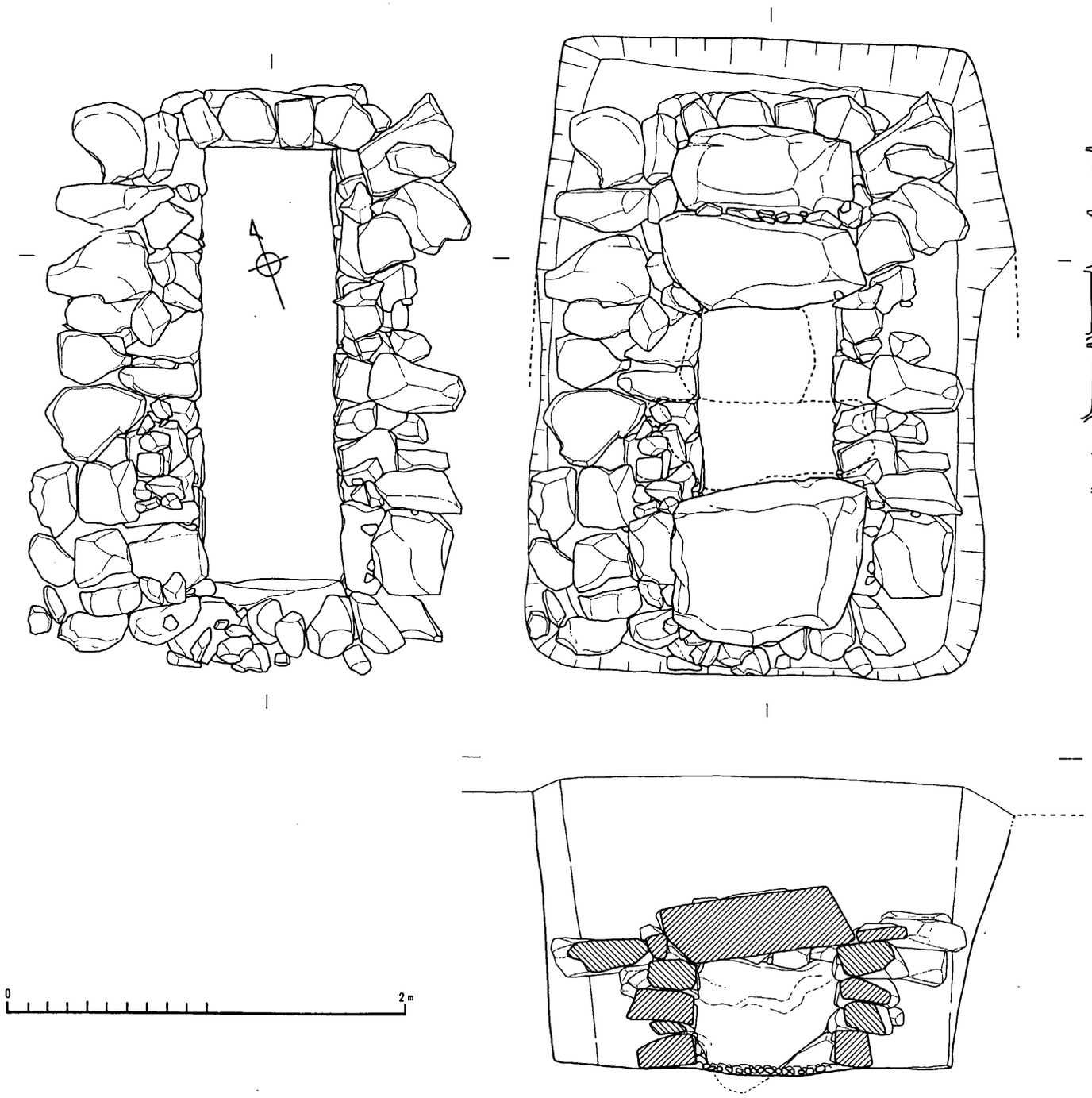
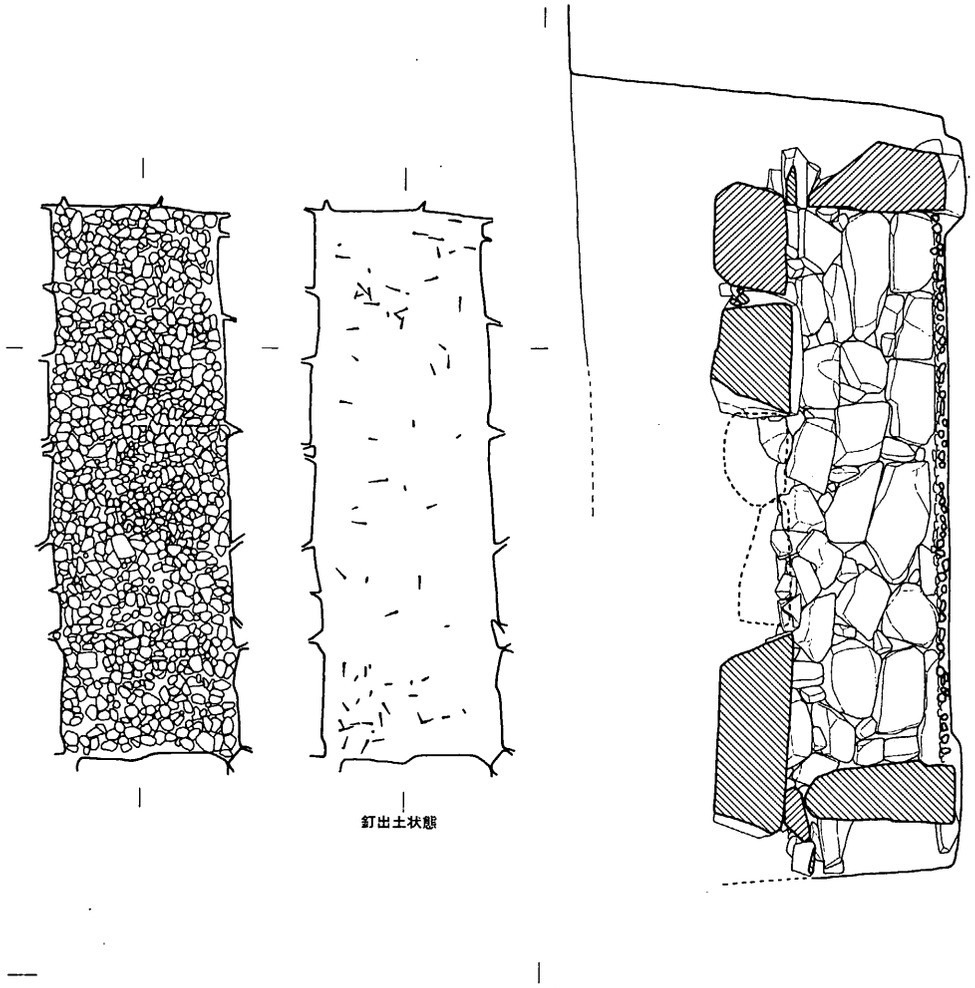


図22　SX01実測図（1/30）



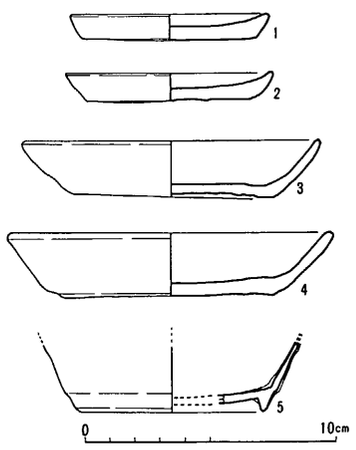


図23　周辺出土遺物（1/3）

1、検出遺構

SX 01 (図21、22、図版9 ～12)　竪穴式石室である。墳丘、盛土、周溝などの外部施設は認められなかった。石材はすべて花崗岩を使用し、南北には大きめの石を縦に用い上面に人頭大の石を一段積む。東西の側壁は約40cm大の石を三～六段ほど積む。天井石は5枚であるが工事によって2枚は移動している。床面には3～5cm大の小礫を一段分敷きつめており、その上面で鉄釘を検出した。さらにその上面には暗茶色粘土が厚さ15cmほど一面に充満しており、粘土は流れこんだものではなく木棺の上に置かれていたものと推定される。石室壁体の外側に控え積みはなく、石室の上面に石を一段分敷き並べている。墓坑の長軸は 3.2m 、短軸は 2.4m 、北側の深さは 1.5m 。石室内法の長さは2.22m 、北側の幅は0.67m 、南側の幅は 0.7m 、南北側とも高さは 0.6m である。なお墓坑の南には大半をカットされた SX 02があり、別の埋葬主体の存在した可能性がある。 SX 01は SX 02より新しい。

2、出土遺物

SX 01出土遺物

鉄釘が60本ほど出土した。長さは6～8cmで、釘に付着する木質の繊維の方向から、 1.5～2.0cm厚の棺材が使用されたと推定される。

周辺出土土器 (図23、表4、図版15)

原1561の地域から採集したものである。

土師器

皿a (1、2)　底部は糸切りされる。

坏a (3、4)　底部は糸切りされる。

青磁

坏 (5)　灰白色の胎土で厚めに施紬される。高台畳付は全面施紬後にカキ取りが行なわれる。龍泉窯系青磁坏Ⅲ類に分類される。

器種	A	B	口径	器高	底径	C	D
皿a	1	1	7.9	1.1	7.0	○	?
	2	2	8.3	1.2	6.5	○	○
坏a	1	3	11.9	2.3	7.9	?	○
	2	4	12.7	2.6	8.4	○	○

表4　周辺採集土師器計測表　単位cm

A. 番号 B. 挿図番号 C. 内底ナデの有無 D. 板状圧痕の有無

3、小　結

SX 01については①、調査範囲内に古墳時代遺物を1点も出土しない。②、墳丘などを持たず墓坑の上層に中世の遺物を含む堆積層がある。③、竪穴式石室を再利用したものではない。④、石室壁体の石の積み方は乱石積みのような外観を呈する。⑤、釘木棺墓である。…などの諸点から古代～中世の墳墓と推定される。歴史時代の竪穴式石室などの墳墓は二、三例の報告が知られるが、やや特殊な類例として注目される。平安時代、この地域一帯に建てられたといわれる原山無量寺との関連も考慮される。周辺採集土器は13世紀後半から14世紀にかかるもので原遺跡の存在した一時点を知ることができる。

付編　「宮ノ本」遺跡出土の人骨

九州大学解剖学教室 永 井 昌 文

1号墳第1主体人骨：男性，熟年

出土状態　床に板石を有する組合石棺内に仰臥伸葬の姿勢である。ただ頭骨が下顎もついたまま粘土枕より右下へ転がり落ちたような状態であるのは、おそらく自然のなせるいたずらで、まだ完全に軟部が融解しきらぬ以前、棺内に時に水が溜まることがあったためであろうと解される。他の全身骨の配置はおおむね自然である。

保存状態　全身骨格の約二分の一が残存するが骨質は不良である。棺床に接した部分および各長骨の海綿質に富む骨端部の保存が悪い。残存骨は、右半を欠く頭骨、肘の高さより上の上半身骨、左恥骨、両側大腿骨・脛骨の骨体部などである。

なお、顔面にはわずかながら丹の付着が認められる。

推定年令　残存歯牙の咬耗著しく（Martin 3～4度)、下顎大臼歯はすべて脱落しそれらの歯槽は閉鎖して萎縮が強い。また幸い残った左側恥骨結合面の状態は50代の様相（Todd 第Ⅹ期)を呈している。これらの事から熟年で50年代の年令を推定した。

推定性別　左側恥骨の形状より男性であることはほぼ確実である。頭骨の所見も、あらゆる観点からみてそれを裏づけている。

推定身長　160cm。大腿骨は骨体部のみしか残存していないので確度の高い推定は困難である。やむなく左側大腿骨と同様の太さと形状を有する現代人のそれの最大長（420mm）からPearson氏の式を用いて上記の如く推定した。

頭形　左半を欠く頭骨であるので確度は落ちるが、示数81ほどの中頭型に近い短頭型と思われる。

抜歯の有無　歯槽膿漏による脱落と見られる歯牙の欠失が多く歯列は不揃いであるが、前歯部を精査しても、風習的抜歯を思わせるような積極的証左は無い。

特異形質　下顎角の外側への張出しが強い（俗にいうエラの張った）特徴を有する。これが奥歯の病的脱落が早かったために、無理して前歯を使う必要から咬筋付着部が異常に発達したというような個人的食習慣に基づくものか、あるいは元来そのような遺伝的形質をもっていたのかは、古人骨研究の現状では速断しかねる。

6号墳A人骨：女性、成年（20代）（図版16)

出土状態　B人骨とともに後記する。

保存状態　B人骨よりは明るい赤褐の色調を帯び、顔面にわずかながら丹の付着を見る。残

存骨は、ともに大きく左半を欠失した頭骨と下顎骨、上半身各骨、左寛骨、骨端を欠く下肢長骨などである。全骨格量の約$\frac{2}{3}$、骨質は不良である。

推定年令　咬耗（Martin 1 ～ 2 度）、縫合の癒合は認められない。従って比較的若い年令を思わせるが、左恥骨結合面の性状はTodd のV期を示し20代でも後半であるらしい。

推定性別　前記の恥骨の形状、大坐骨切痕の開きなどから見て女性であることはほぼ確実である。華奢な頭骨と四肢骨の性状もあらゆる点から見て女性であることを裏づけている。

推定身長　150.7cm。下端を一部欠失した右脛骨の推定最大長323mmから推算した身長は上記の通りである。

頭形　残存せる右半から推定した示数は81程度で中頭型に近い短頭型である。

抜歯の有無　この風習の痕跡は明らかに認められない。

6号墳B人骨：　男性、成年（20代）（図版16）

出土状態　A人骨とともに後記する。

保存状態　全骨格量の約三分の二、骨質は不良で、木の根によると思われる腐食痕が著しい。またA人骨とは明らかに違う暗い黒褐色を呈するが、精査すると処々にかすかな丹の付着を見る。残存骨は、後頭部と右下顎角を欠失した頭骨と、上半身骨、および多くが骨端部を欠く下肢長骨などである。

推定年令　咬耗（Martin 1～2度）以外に、より確実な推定の根拠を欠くが、頭蓋縫合の癒合が矢状縫合の一部に認められることから推してA人骨よりはやや年嵩であるがやはり20代の後半であろう。

推定性別　骨盤骨の腐食著しく、頭骨および四肢骨より判断するよりないが、これらのあらゆる性状から推して男性として間違いないと思われる。

推定身長　157.8cm。左脛骨最大長333mmより推算した。

頭形　後頭部を欠くため最大長の測定が困難であるが、全体の形から推して、前記2人骨と同じく示数81程度で、中頭型に近い短頭型と思われる。

抜歯の有無　上顎右側の側切歯と犬歯が欠失しているが、歯槽は完全に存在し、若年期の抜去を思わせるような痕跡はとどめていない。

附記

1）A・B両人骨は同時埋葬なりや異時埋葬なりや。

この両人骨は同一石棺内に、いずれも頭位を北々東に向けて仰臥伸展の姿勢で発見された。ただ棺の内幅は2遺体を並置するには狭隘に過ぎ、当初から2遺体を収容すべく設計されたも

のではないと思われる。

そして、A遺体はB遺体の上位に重なっていたような人骨の配置である。実測図、写真で見る限り、両人骨の配置は自然の仰臥伸展位をほぼ保っているようであるが、なお仔細に観察するとB人骨よりはA人骨の配置に乱れが大きい。例えばB人骨の頭骨、脊椎骨、右膝蓋骨など多くが自然位を保っているのに対して、A人骨には同様な骨ならびに右上肢骨に死後の転位と見られる所見がある。A人骨のこの乱れは、B遺体の軟部が全く腐朽し去る（普通は5年はかかる）以前にその上にA遺体を重ねたためではなかろうか。

以上の人骨に関する所見のみでは同時埋葬（合葬）を否定出来ないのであるが、発掘報告には墓坑の掘り込みに2時期があることが記されている。これはA遺体の異時埋葬（追葬）を物語るものであろうし、人骨の所見から両埋葬間の間隔は5年を出でない比較的短いものであったろうと推察される。

さらに、上記をすべて認めるとすると、ともに20代後半と推定されるこの男女両者の関係はやはり夫婦とみたほうが良さそうである。

2）九州古墳時代人骨としての「宮ノ本」人骨

2体の男性「宮ノ本」人骨には、北部九州古墳時代人の一部に見るような高身・高顔・高眼窩の特徴は見出せない。むしろ九州古墳時代人の平均的な身長・頭形・顔貌を呈し土着的傾向が強い。

図　　版

筑前国分尼寺跡第 1 次調査（東から）

筑前国分尼寺跡第 1 次調査 SD001（南から）

図版 2

筑前国分尼寺跡第 2 次調査（北から）

筑前国分尼寺跡第 2 次調査（東から）

陣ノ尾遺跡遠景（南から）

陣ノ尾遺跡（北から）

図版 4

陣ノ尾遺跡第１次調査．第１トレンチ（南から）

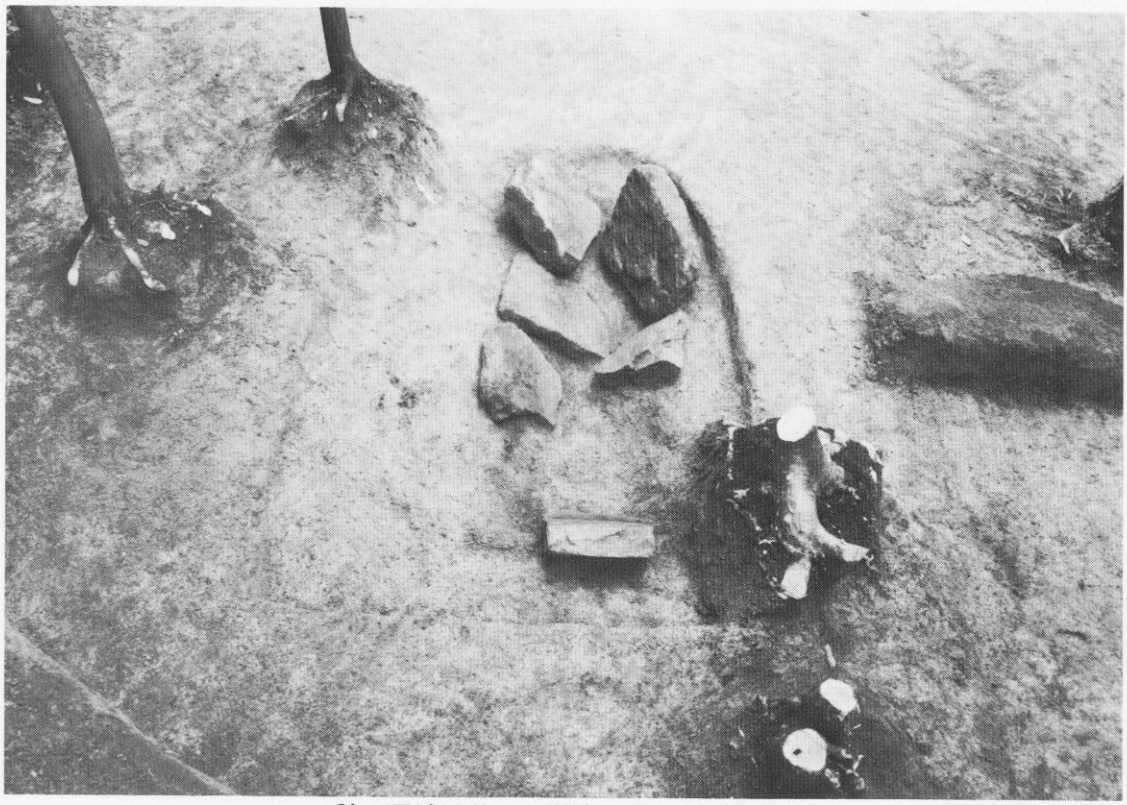
陣ノ尾遺跡第１次調査．SB01（北西から）

陣ノ尾遺跡第 1 次調査
第 2 トレンチ（南から）

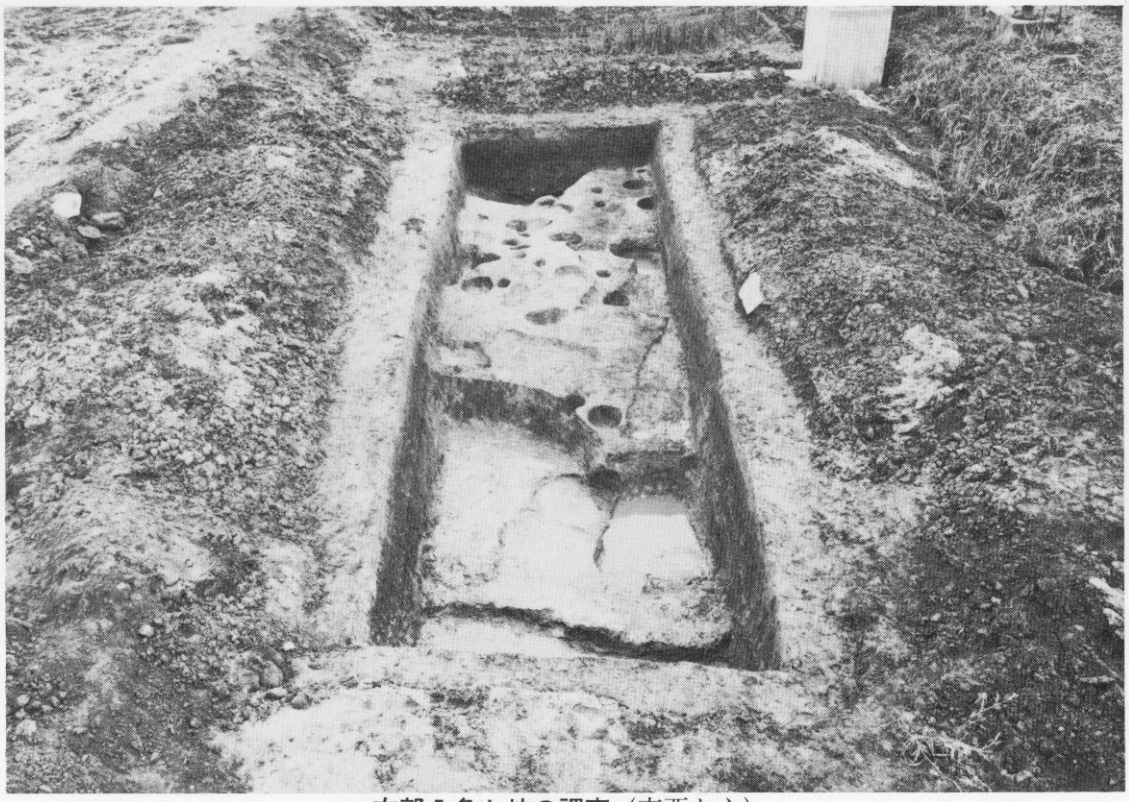
陣ノ尾遺跡第 1 次調査．ＳＫ02（東から）

図版 6

陣ノ尾遺跡第１次調査．ＳＸ03（東から）



陣ノ尾遺跡第１次調査．ＳＸ03（北から）



左郭八条七坊の調査（南西から）

図版 8

原遺跡遠景（南から）

原山中堂跡の現状（西から）

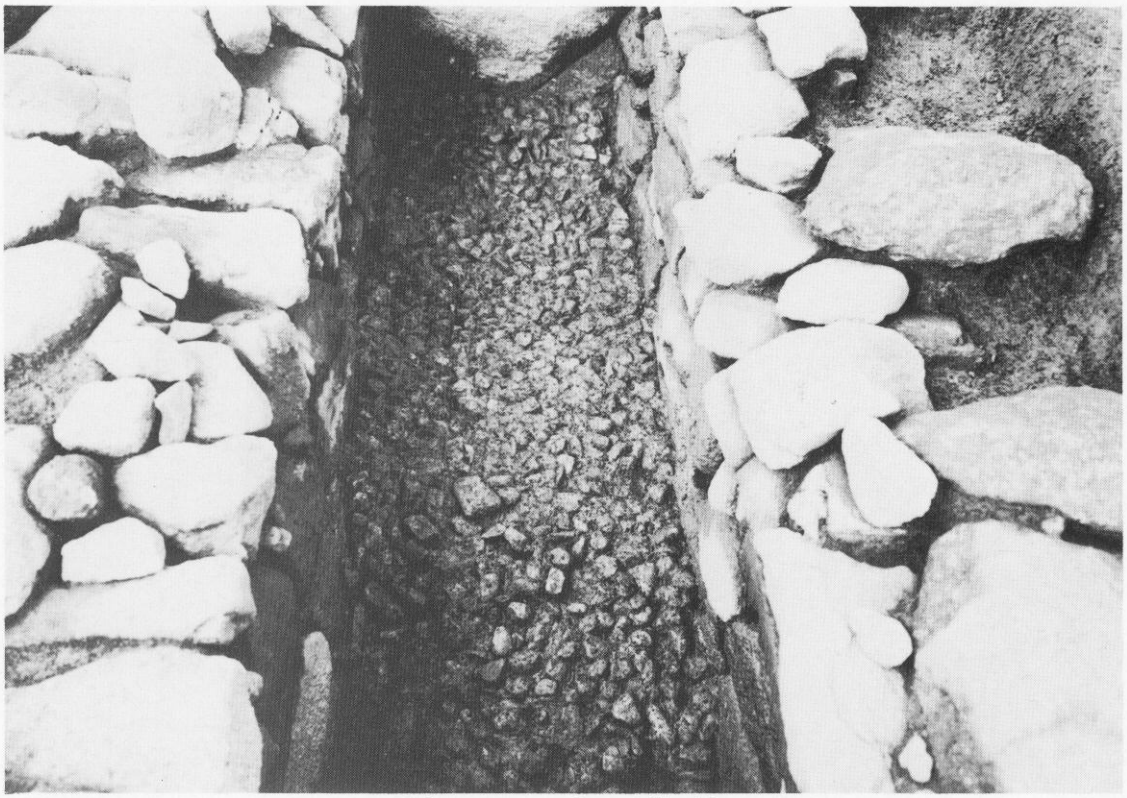
原遺跡調査全景（西から）

原遺跡ＳＸ01（西から）

原遺跡ＳＸ01（北から）

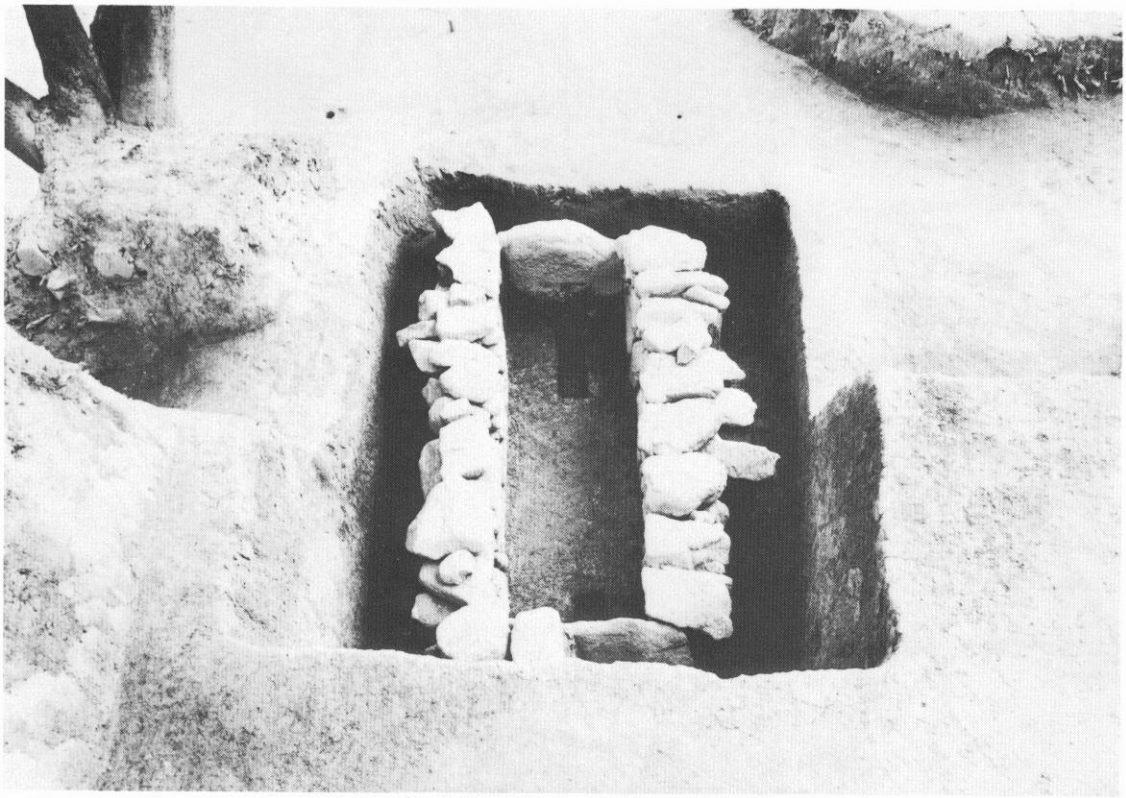
原遺跡ＳＸ01．粘土の出土状態（北から）

原遺跡ＳＸ01（西から）



原遺跡ＳＸ01．床面礫敷（南から）

原遺跡ＳＸ01（北から）



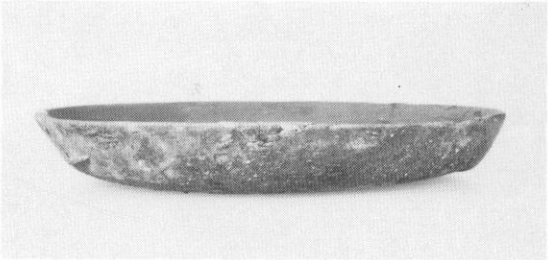
原遺跡ＳＸ01．全掘後（北から）

原遺跡．第２トレンチ（北から）

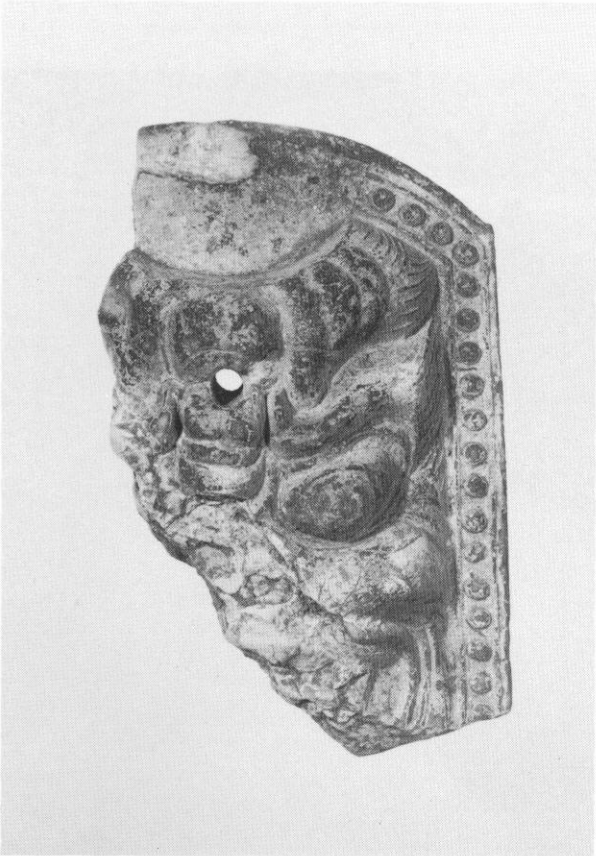
原遺跡．第３トレンチ（東から）

図版14

1

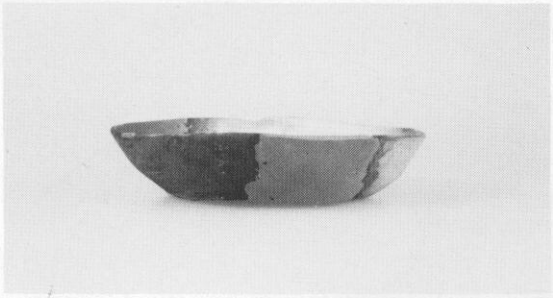


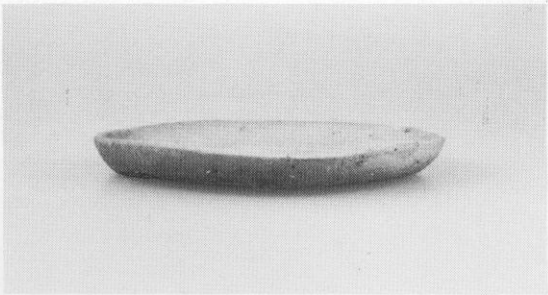
3

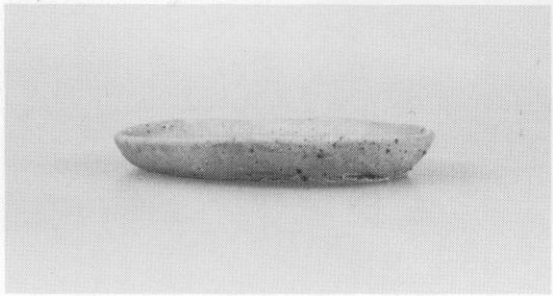


1

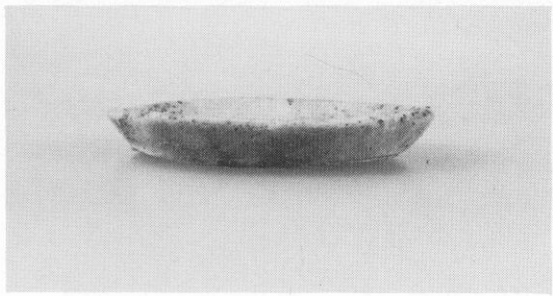
筑前国分尼寺跡第１次調査出土遺物（上）
筑前国分尼寺跡第２次調査出土遺物（中、左下）
陣ノ尾遺跡第１次調査出土遺物（右下）

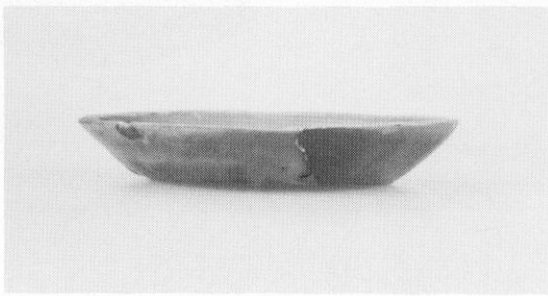

2


6

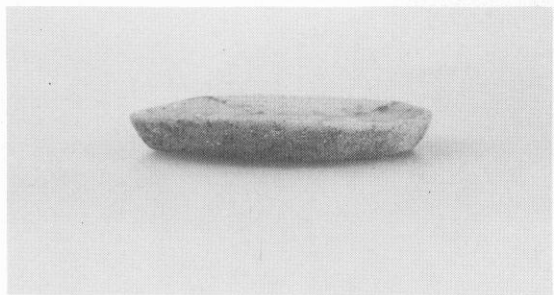

4

7


5


10

左郭八条七坊出土土器


1

3

2

4

原遺跡出土土器

B♂

A♀

宮ノ本遺跡6号墳出土人骨

筑前国分尼寺・陣ノ尾遺跡

太宰府町の文化財第４集

１９８１．３．３１

発行　古都大宰府を守る会
福岡県筑紫郡太宰府町大字観世音寺

印刷　瞬報社写真印刷株式会社
福岡市中央区天神５丁目５番15号